

氏 名	谷口 真紀
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第665号
学位授与年月日	令和7年3月19日
審 査 委 員	主査 教授 竹谷 健
	副査 教授 鈴木 律朗
	副査 准教授 石原 孝也

論文審査の結果の要旨

不妊症は、世界中で何百万人もの生殖年齢の人々に影響を及ぼし、WHOによって公衆衛生問題とみなされている。不妊治療において人工授精を何回実施するか、どのような場合複数回の実施を避けて別の治療法に切り替えるかは不明なままである。申請者は、2019年1月から2021年12月までに島根大学医学部附属病院で実施した人工授精（IUI）（421組、1380周期）を対象とした後ろ向き観察研究を行い、調整前後の精液所見と妊娠例（81組、87周期）との関連性を検討した。女性と男性の年齢での比較では妊娠例のほうが有意に若かった。調整前後の精液所見は妊娠例、非妊娠例で精液量、精子濃度、総精子数、精子運動率、総運動精子数のすべてで有意差を認めなかった。調整前精子濃度がWHO基準である1,600万/mLを下回る場合の妊娠率は有意に低かった。調整前精子運動率がWHO基準である42%以上を下回っている場合の妊娠率は有意に低く、調整後精子運動率がWHO基準を下回る場合の妊娠例はなかった。過去の精液所見が妊娠率に影響するかを明らかにするために、IUIを3回もしくは4回実施した症例を検討した結果、調整前後で精子濃度と精子運動率が全く改善しない場合では妊娠例はなかった。特に、精子運動率が毎回改善した症例において妊娠率が高かった。また、妊娠例における過去の不成功周期での精子濃度の正常化はばらつきを認めたが、精子運動率では3回実施症例では全例、4回実施症例では14例のうち13例が正常化していた。女性の年齢における比較では、調整後精子濃度がWHO基準を上回っている場合、36歳未満の女性の方が妊娠率は有意に高かったが、WHO基準を下回る場合は女性の年齢と妊娠率に有意差はなかった。男性の年齢と調整前精液所見において、精子濃度、総精子数、総運動精子数は相関なく、精子運動率のみ負の相関を示した。これらの結果から、調整後の精子運動率と過去の精液所見はIUIの成功において重要な指標であることが示唆された。